

蔵のしごと

鈴木京子

十一月から三月半ばまでの四ヵ月半は、地元の造り酒屋で働いている。

毎日、何百キロというコメを蒸して運び、翌日のためのコメを研ぐ。蔵の中でも温度は五℃以下、戸外に干す洗濯物は雪の中ですぐ凍って固くなる。一方で、一日のうち二時間程度は室温三五℃前後の麹室の中で作業する。寒いけど暑い。とはいえ、一日中「水わちゃ（水仕事）」だから、やっぱり基本的には寒いデス。

もともとは南部杜氏とんしがチームで出稼ぎに来て住み込みで仕込んでいたが、三十年ぐらい前から地元のコメ農家が働き手となり、今では杜氏も含め全員が地元の農家だ。かつて多くの家が冬場に東京などへの出稼ぎ者を出していた頃には、地元で稼ぎを得られる蔵人くらびとの仕事は人気があったらしい。しかし、競争力重視の「産業化」を迫られた日本の農業は、いまや大規模専業かサラリーマンと兼業の週末農家でなければ成り立たず、農耕を軸に複数の職業で生計を立てて暮らす「百姓」がいな

くなった。若者に限らず求職者は「通年雇用」を求め、蔵はなかなか働き手が見つからない。私の働く蔵も、夏前から職安に募集を出していたが、仕込みが始まっても人員が埋まらず、昨年より三十代が一人少ない、六十代二人、五十代一人、四十代一人、三十代二人、そして六十代女性と私の八人でスタートした。

十一月も終わる頃、吟醸仕込みで忙しくなる時期を前に「これ以上は待てない」と杜氏が自ら社長に掛け合い、シルバー人材センターから男性二人を派遣してもらうことになった。本当は二十代を求めているのだから、やはり現場にはそれなりのしわ寄せがくる。さらに、二人のうち一人は仕事でも腰と膝を痛そうにするので、重いものを持つたり走ったりする仕事はさせられず、私たち女性ができることになった。シルバーさんの時給は八〇〇円で、私の時給は七五〇円だけどネ。

そんな状況の中で、力仕事が集まる若い衆（といっても、三十三歳と三十七歳なんだけど）には労働のきつきに加え、年配世代との待遇格差（時給が高いだけでなく、上から三人は雇用保険対象で蔵のない時期は失業保険を受給しているらしい）に不満がたまり、陰で「来年は来ない」と口にするようになった。

私は彼らと年配世代の両方が理解できない。まず、若い衆の不満はもつともなのだから、なぜ待遇改善の交渉をしないのかと思う。そして、それ以上に理解できないのが、杜氏も含めたジイさん世代の態度だ。彼らはよく「社長がケチだから」と言い訳するけれど、ともに働く仲間としてなぜ

若い衆と自分たちの待遇格差を何年も放っておけるのか。社長がケチなら、孫もいて年金ももらえる年代なのだから、子育て世代にその待遇を譲ってやれ！と私は腹立たしいのだが、ヒトってね、やっぱりみんな欲深い生き物なんだね、そんなことは考えもしないみたいだよ。

そして、私もまた「来年」はどうしようか、悩んでいる。冬場の収入源がほしいという欲と、こんな格差を放置する人たちと働けるのかという気持ちの間で。